

編集後記

△二年振りに『哲学』第十一号を発行できるのはまことに喜ばしい。第七号以来前号まではいづれも、文学部で出す『文学論集』に発表された論文を転載してきたが、本号の三篇は書きおろしである。教員以外の会員の論文を掲載しようと思へば、今後この方式を続けなければならぬ。

△ついではこの機会に、原稿を寄せられる方々に「完全原稿」を出して下さるやうお願ひしたい。ここで完全原稿とは、校正時に印刷所の側の手違ひによつて生じた誤り以外には、訂正を必要とする部分がないやうな原稿をいふのである。

△本号は御覧の通り、活版印刷ではなくタイプ印刷によつてゐる。最近は技術の向上で、タイプ印刷も活版印刷に較べてあまり見劣りしなくなつたと言はれる。また印刷費用の高騰に対抗するためには、かうした活版印刷以外の方法にたよる必要があるとも考へられる。ただかうした印刷技術の長所を生かすためには、校正の際に、むやみに誤字の訂正や語句文章の書き直し書き足しをしないやうにすることが肝要である。

△今回の原稿がさうだといふわけではないが、実際驚くほど用字や文章の構成に無頓着な原稿がある。文章の点は暫くおくとしても、用字については、例へば『用字便覧』など簡単に手にはいることである。さうしたものを面倒がらずに使へば、正しい文字を書くことはだれにも容易にできるはずだと思はれる。

△昨年は哲学の大きな国際学会が少くとも二つ開かれた。私はたまたまその一つ、七月十一日から十六日まで、オーストリアのザルツブルクで開かれた「第七回論理学・方法論・科学哲学国際学会」に出席することができたので、この学会の概要と私の個人的な感想を簡単に述べてみたい。なほ、この学会は会場を各国に移して四年毎に開催されてゐる。

△学会は十四の部門に分かれ、それらは(1)証明論および数学基礎論、(2)モデル理論、(3)帰納的関数論と計算の理論、(4)公理的集合論、(5)哲学的論理学、(6)科学の一般的方法論、(7)確率と帰納法の基礎、(8)物理科学の基礎と哲学、(9)生物学の基礎と哲学、(10)心理学の基礎と哲学、(11)社会科学の基礎と哲学、(12)言語学の基礎と哲学、(13)論理学・方法論・科学哲学の歴史、(14)科学の倫理の基本的原理である。各部門には学会が依頼した講演(六〇分、討

議(二五分) 三ないし四を配し、またシンポジウムが全部で五つある。「言語的転回——論理学の新しい方向」(第(5)部門)、「理論の構造」(第(6)部門)、「ゲーデルの生涯と業績」(第(13)部門)、「医学の倫理」(第(14)部門)、「科学のおよび倫理的合理性」(同上)がそれである。個人発表(二〇分、討議(一五分)は総数五一八(以下の数字は学会プログラムによる)二五四のセッションに分ける。部門別に、(1)一七、(2)二〇、(3)一四、(4)一一、(5)六八、(6)八〇、(7)三二、(8)七五、(9)二八、(10)三五、(11)三九、(12)四五、(13)六四、(14)〇である。

△参加者(約六八〇)を地域(国)別にみると興味があるかもしれない。それらは、米国(一六〇)、連合王国(英国(三九)、カナダ(三三)その他(一九))を筆頭に、地元オーストラリア(三二)、西独(八六)、オランダ(二七)、フィンランド(二〇)、スカンジナビア諸国(一七)、その他の西側ヨーロッパ諸国(七〇)、イスラエル(一〇)、日本(二五)、韓国、台湾および東南アジア諸国(二五)、中南米諸国(七)アフリカ諸国(四)と続く。共産圏の方も、ポーランド(三四)を始め、チェコスロヴァキア(二二)、ソ連(六三)、その他の東欧諸国(二八)から予想以上に多くの参加者があつたやうである。もつとも、自国の出国許可が得られないとかで、期待された講演が取り消される例が、これらの国々の哲学者の場合にはときどきみられた。

△かうした国際学会に出てみると、世界の科学哲学者が現在主としてどういふことに関心をもちてゐるかが、かなりよく分かるやうな気がする。三十年前に較べると、さうした関心の持ち方やその対象も、当然のことながら変化してきてはゐる。しかしその変化は天地が引っくり返るやうな急激なものではない。この点で私は、日本の学会で受けるのとはかなり違つた印象を、この国際学会から受けたやうに思ふ。しかし考へてみれば、それも当然の話なのかもしれない。だれしも長い年月をかけて育て上げてきた理論や思想を、十分な検討も加へることなしに捨ててしまふやうな真似はしないものである。借り物の気安さでさういふことができる人があれば、それは目先の利く賢い人といふよりはむしろ、自前の思考を必要とするまでに成熟し切らない人といふべきかもしれない。

△国際学会に出かけて行くことになは多くの不便があるとしても、質の良い研究情報が得られるのはやはり一つの魅力である。日本で紹介される「情報」が全く誤つたものばかりだといふわけでもない。しかしそれは幾つかある考へ方の一つに過ぎない場合が多いのだから、その点を心得ておかないと怪情報に振り回されたり、見当はずれの勉強をしたりする結果になることが、とくに哲学の場合には多いやうに思はれる。(竹尾治一郎)

編集委員 川崎幸夫、竹尾治一郎、
東専一郎